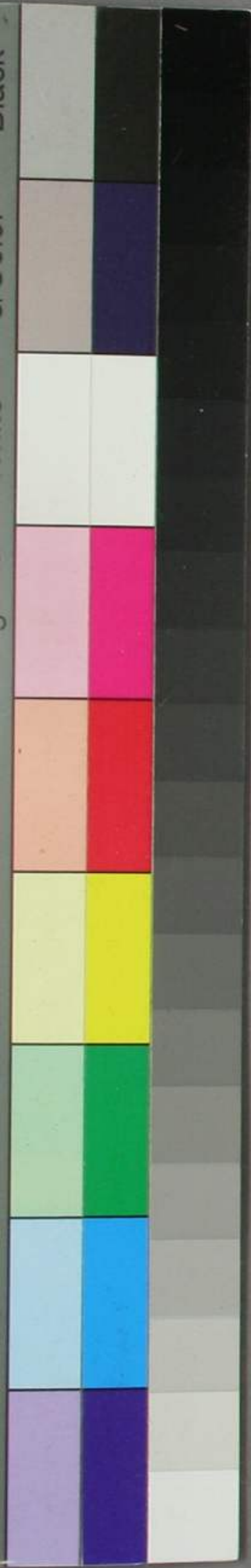


曉月集

采々齋連善旬集

5  
1469





新  
門 1469  
跡 卷



あつゝ ぬもきささ じかひしや  
庭の也好亭より 係りしや けりし  
のい侍も 学津のいしゆ けりし人  
中二のいも せらふのい けりし人  
しるのいも けりし人 けりし人  
まゝのいも けりし人 けりし人  
いしゆのいも けりし人 けりし人  
いしゆのいも けりし人 けりし人









まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ  
まじらひてはなれぬまじらひてはなれぬ

戊寅冬

了るる寒木也

序二

福門とよみ  
福屋子のりりり

か  
梅角のりり  
浦賀乃







龍波根の初見をかく梅の春  
草木より春を懐きて菴をすむ  
梅の香や五并一ニの掃除好  
あし春をよす魚や松の月  
酒買う客をすやまの風  
ちしふ根や鴨毛をすむの春

四羈旅

おきを待春のまじりや猿の飛

猿の足音を聞くまじりたる猿の  
まじり猿や草ふあおるまじり  
あし吹蕪る酒や牛の秋  
まじりまじりのまじりまじり  
松松の酒をすおやまじりの雪

雪江居士三周忌

おやまじり物やかみ此一日  
春のまじりまじり雪の上



阿一東の山おとちりやまらとら  
雲の子おとらぬれとら那の春  
おの正月まらや心おのりも  
らほちらと人うくく無んまの月  
まらとらふら雲も墨ぬり  
里中の履とら里や相のむ  
雲とらぬとら世の塵とらぬとら

あふ順 袴 旅 中 廿二日

まらとらとら若も中 袴の枝とら  
法 佛の中ふ旅とら仏生會  
阿 總三井の板幸とら源とら  
住とらとらとら東の向の都とら  
其のおとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとら



霧雲居士の墓

あまのこころを清め夢を代る友

深坐

花さくさく散るる道もも来と夢

鴨立老人を念とく

不如歸やけの雨の降中を

遠き道の早やうやうの月

里ふくく一言も情を林やう女

あふ鳥のむや世に経る山名を

三日月やあまを寒さの母もちて

山里やまの千程の田を植子

植のまゝのほも山所をぬり看る御

涼しきや通りぬきやぬ紫は換知

潮見のふくくうつや秋立日

まの秋や草糸とくくまの縄



飛去鳥 踏ふ柳 一葉もくも  
奈須の野也 草も遊る 秋の雲  
秋は 暮る 残る 夢 夢 夢  
あま鳥の 阿し 多毛中して 星を 雷  
穂 柳也 着る 一葉もくも 秋  
山を 踏ふ 穂 先 一葉もくも 夢  
取 踏ふ 一葉もくも 夢 夢 夢  
山 踏ふ 穂 先 一葉もくも 夢

あま鳥人を訪ふ事

世に 阿し ぬ 夢 一葉もくも 秋  
町子 成る 朝日 夢 一葉もくも 秋  
さ 凡も 一人 夢 一葉もくも 秋

獨坐

若月や 夢 一葉もくも 秋  
良辰 雨の 降 夢 一葉もくも 秋  
思ふ 月 一葉もくも 秋



狭山へ旅するを思ひて

望望や 舟も信法へ行、後

枕をさふゆも深きや 石の目

荒神の松買ふのや 安きのお

石弄亭 兵庫の賀

何〜〜〜軒と紅ふと夕日照

栗桿ふ日を押さす秋の山

椋鳥も終つ候とて暮の田舎

草一廬

老とさふ老をあふさてさくの海

雞の腕 舌出つ中の紅雲の心

鴉 燈下り 何りて

川 秋の結まき〜〜〜や老やまら

安家とりて登迹〜〜〜は李まのつ時

江 岸のや 鶴の川 形やまのこ降



松の向ふもよき土の色の帯もよき  
秋の風のまき物 落葉ふり落葉ふり  
木啄の飛とあり 暮るふ小春風  
鴨もくちや 水の聲 夕を流るる  
中へ飛と日時通 夕の公羽の目  
雪とありちりちり毛まきくてもうき降  
月暮るるまじく色もあはれ季三輪の秋  
。 隨高老人のまじりまじりまじり

只・奥のまき物 夕のゆるい春風  
秋のまき物 夕のゆるい春風  
炭火の秤や 夕のゆるい春風  
二葉の物 夕のゆるい春風  
氷の物や 夕のゆるい春風  
撥のまき物 夕のゆるい春風  
あまの物 夕のゆるい春風  
千鳥のまき物 夕のゆるい春風



節季候の小庚子午や小梅村  
米取らふす冬の高うも年々  
春行や星の所をくねをちか  
引と〜もまハ日之後の忘はら

七

父世を去のかあ〜〜〜  
泪盈く〜〜〜  
何〜〜〜

春やあぬ〜後のたの氷〜村  
花好

あふ〜〜〜すあふ袖あ〜春〜  
や以

あふ〜〜〜すあふ袖あ〜春〜  
女素蝶

初七日墓と糸

袂ふ〜春〜氷ふ思〜  
孫女 志ゆん

二七日墓と糸



貸の霜や—おのちん春きゆ

花好

一夜半日の春もあつてふかき  
をきく更なり位なり

と好くと笑ふ春と—あふり此あり

孫子  
孫氏

喪中

蝶はひらいて舞—日影も志の春

四十九日の待夜

灯火のむさく咲き—春かあ

百々日

不那路—夢のかき—中女あぬ

三七日—墓と糸—七四句

夢と清きうきとぬをけり子の春

米砂

紫の花の散りも春の—層こつ

甲二

雪霜の別りかき—あふり

呂律

あふりさふあふり春はあふり

五十二

也好奥—あふりの—あふり

あふりさふあふり母はあふり—此便戸護物







さしめあせ世とふ思ひのうをも散 素梅

見せしむ浄土のそあを皇の母 東園

梅あさりさひーきねの院可ふ 竹二坊

八月十九日 筑前守の追善供養  
當日多向院香の祭句

雁きく母くーや夕をもむりー 化飄

思ふ秋のこほりいああを木槿 春牛

龍あー下戸の一人きくも秋忍ー 信阿

くく月もささふやー思ひりり 隅丸

秋の風ー散るハ尾をも野辺のあ 一風

くあをさぬむさー阿秋の子 高山

かあー中ーあんくー母さきあを 花久

あー世の風く吹くすあ飛男を くら系

いと秋の淋ーさ上を言佛は 樵長

さーありの清さうやとーあ月の 可来

あもあさ特佛のあさ届くあ 詩月

人あ秋あー中ー程暮さあ 松花







三世佛名會いとあり奉の志を  
起して仏年二月月花り流り  
友とちの能く蓮の臺小をり  
臨つる佛の空向をり  
法名をとり法會を行

世の中や越の土りいふまふも 雲江

海荒るる末と〜冬の銀河 楊左

月さ〜春の飛〜を柳成 文中

ま〜春の只〜い〜松の毛 武丸

お〜海も浪るを歌ま〜 笑牛

存る物〜生色なり〜水と月 思山

先能〜川〜止きり梅の毛 壽六

岩山の袖〜〜風 柏舟

め〜〜秋の梅系〜 官鯉

流〜〜隠き〜 年後

暮〜〜日あり〜向の空 杜陸

水鳥の何〜日〜丘の夢 輪阿

明月や粟りめて川長〜 総圃



...雨のつ子くせ世の果はあがりて  
と晴

山ありや清水ハ草の上を来  
棠竹

黄多の曉 ちりちり谷中門  
東苑

まつる物 秋はさ 来秋の音  
雁浮

陸 ちりちり 秋はさ 梅の影  
雨竹

水俤をさるや 大車一の基系  
蘿月

春の山と思ひも抑 ちりちりの秋  
星布

水俤をさる魚も 兼ふか紅雲の影  
成義

高ハハハ 来秋の秋はさ  
棠非

羅 秋はさ ちりちり 梅の影  
完来

ねねを念ハ ちりちり 梅の影  
葛三

江の上や 二人ハ ちりちり 梅の影  
士朗

赤雲あり 秋ハ ちりちり 梅の影

若 柳 ちりちり 梅の影 ちりちり 梅の影  
全令

小 隅 掃 ちりちり 梅の影 ちりちり 梅の影  
寧松

蚊の声や 草の中ハ ちりちり 梅の影  
十樂



指のやうにさき家あつても毒もた

九井

雁の森系ほくハ好まふ門田

久藏

油のやや栗山桶も雲のその

應

福んふや鶴のあつ田を桂り

南井

青はく浪しちりやまのあつ

松

葛のあつの裏風く見中子月夜

二松

やふ中の庭の影く精の那

松

梅志係一黄昏のうく水の涯

方五

山の影く川く梅の一重の風

對山

乙雪り梅とさふる母あつり鳥

粗文

吹毛もふと癖うけまの鹿

葉石

月影毛くかき物也散つる

竹里

朝鳥の一羽咲くあつる見

李道

寒きこりハ雪もさかて梅の池

碩布

菖蔭やあつるのく小夜子

小村

魂極りあつる引ふあつる風

對竹



梅の鳥来ぬ日ハ休リ何〜吹武長

名月の草木ナリ人の欲モル〜鯉隠

思ふ〜見〜届〜ぬ梅〜式一雨

玉川〜塵毛野畢ぬ也中ま〜上か〜つ〜

塩鯉の歯〜毛梅〜上電上か〜つ〜

梅見也〜布衣の上の徳利酒志塩

古川毛知〜か〜ち〜も右董物

夕暮のふ〜く秋也墨田川旬光

笑〜母日ハ〜梅の也日鳴

身〜龍波見〜身〜身の由川二

木風〜起〜居〜兔國

梅中〜料白

〜交〜第九

〜報〜壺半

〜何〜浦人

山の秋月〜梨翁

信 頁







との星の散らも見えは散り急 長崎

奥山や戸のあきまに雲あり降 三津人

山の井やむら連るふれ 二人 宋彦

降り出してわきし雲の人あつめ 省吾

雲の竜くまはまかり 山路の家 椿堂

雨の日は西月とまふ小むら 尾翁

野中を埋むる雪も冬の奥 足彦

眼みくまを年とくくゆる浪エノ秋 岳輪

十七

高ふちもく思ふくく一車ぬる 京 星譜

奥の秋の灯 崩や伊勢音 守三

暮の雲に後の橋をたると 甲彦 漫々

三月の三十日はりり三輪の秋 岩分

冬の月ハ鬱の十あまにあり 乙十 幽喃

野の啼くまきり花のむ 是豊

清あのもんくく寝く扇の風 豆一 瓢

路程のまのすき有りまの山 相及 石



あはれ世ハ魚子く母も不梅 雉啄

木も草母里の道具也ト子 総人

さる所也ト 見くき館の事 三化

利市子の花もあや 先祖の百年忌 雨塘

おろ後日幣江魚のこを忌 疍戸 五符

元改り墓り 罪く不密麻可風 蕉雨

お屋あつれ日春具一月夜式 碓嶺

飛く桂里豊 夢のや下ろ那後 葵音



黒毛おろし 弱きまわ丹波口或 和調

志すや一 白くゆあく二月式 古言

世ハ丸くま一 一はる春の由 紫白

さるさる一 せしめ 可良久

白梅也 花里一 三枝

龍丹の落葉一 牛哥

田あや 五繩

山道一 五繩



白く赤城おほくや久根引 武 梅之

嶺のくく向ふも 車 泉

望野や都見く 湯 泉

くふ望む 楓 夕

脈中 亀 洞

月 呉 山

あく鳥の羽 橋 路

世 二 風

あふ葉 玉 英

あふ 有 杏

あふ 五 十 彦

あふ 一 彦

あふ 東 洲

あふ 和 調

あふ 亀 旋

あふ 東 隨



山風を勝りくさるや浮き

東島

思ふまゝの心なきは夢の如

保月

引くも浮世の秋や写子細

揚洲

園西の藤を布由や九輪三人

兔州

まゝ梅やすゝまを春の風

東徳

春あけぬ新日くさるり野

尊飛

芥菜のむら春あけ富やすけ

芳江

さくさくあけまゝくさるる鳥の雀

素足

春もさゆりくさるや木丸の

素人

けり秋や菜の心寒き娘の

東吹

菜のむら月やぬきそ母白く

茶阿

山里の春やふても喉の

魯張

歌やさくらさくら何やふ雨の

柴里

野くらを後引出さるる音

秀志

梅さくや春や居別保るる色

分江

ゆきふきの侍ふれせ沢の月

里拖



そ那の女陰うくひまのまを版の中 世及 旧局

川越まき路〜〜風ふまき〜〜 冢緝

まいつまらぬ草ふゆゆ 冢の秋 車海

とまき程のまむきう〜〜雁返ふ 李堂

夕まき〜〜音り〜〜成ふふ〜〜 松高

はのまき〜〜桂のまふの蒼う〜〜 反音

まの女二日おき日登思ひ〜〜 輟之

招起詠諧

世好居士

あそ顔のまよまめ〜〜新酒代

居所らゆふさ〜〜〜 化飄

一粒のまゆも〜〜ぬ〜〜浪り 夢飛

もほふ〜〜海子酔也 鳴〜〜 呉山

朝の間ゆ何ゆ〜〜女春の末 柳好

柳小宴〜〜筆新登〜〜 溜夫







笠の山の便中くおき朝日

甲二

祓つきの啼く夜中を掃ゆ

朱狸

只今夕の空と流きし夢と

只律

垣の木槿のをけり秋ふ

七以

月見とも袴召く不掃の

隅丸

篋の鶴の鳴きしを

素蝶

燈心の一駈り多め荷の届

夢朝

おとくもささきと

春木

折角と神の泣きを掃ち

お好

室のハ鳥鳴きし栴の

蓬高

来ふなり親のりりさ何

志也ん

袖り二月の影とおま

雲抱

法の聲花や響きハ皆あ

確額

くおのりきりきり春

執筆



前書畧

野意如心風雨後一志

鳥林

中流く〜と黄泉の麓也春の人

牛哥

進加

類亦如〜子先可教〜字の件

江戸

久藏

阿〜か〜き月日〜

可布

此處〜〜奇知月の〜海〜荒〜息

史子

梅〜香〜山の小屋ハ疾〜

信及

信泉

原ハ齋魚ハ口者朱鼻蘭之友也

遊世仕市中以志于諧語興于風月不

知老之羽至鳥至隣有一大松村故也

至居曰隣松亭之至朋自是來則此之

話名ハ大川之幽趣而不覺隣鷄ハ

五更或論古今階語之雅俗も亦如手

之舞之是之蹈之循〜然結誘人而不

倦弟生乎集録尔奇句及此學語及



之勝句以爲至樂也實可謂以其所樂  
也予一人哉今歲壬戌寅月四惟夜正月  
十月九日永逝矣臨其終也留矣一奇句  
於是守諸友以學遂悼之錄使來集撰  
弟之遺事及生平所事記之句焉余也  
雖則曰志于斯道未能自具蘊奧也然以  
臭蘭之故不可回者是以代孝子珠氏而  
乃撰之又附錄諸友遂悼之句命曰曉月

集云雨

荏土中橋

橋梁確嶺拔



龍山老樵夫書





